

2017年正月に

小嶋祥三

「門松や冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」は一休宗純の狂歌だが、昔は現在とやや違う受け取られ方をしていたと思う。それは年齢の数え方に関係する。現在は誕生日に基づく「満」だが、昔は「数え」による年齢の表現が一般的だった。すなわち、正月が来ると一つ歳をとった。これは老若男女、生業、身分など一切関係なく、全国一律に全員が一斉に一つ歳をとった。12月末近くに生まれたわたしは直ぐに一歳になったが、1月初めに生まれた妻は随分と待たされたことになる。その後は正月が来るたびに一つ歳をとった。正月は現在よりもずっと特別な日だったろう。

それにしても、なぜ年の初めが1月なのだろうか（月の名前の付け方はともかく）。ネットで調べるといろいろと出てくる。それにはふれないが、古代ローマでは現在の3月が年の初めだったという。若草が萌え、新芽がでる季節の方が年の初めに相応しいような気がしなくもない。

わたしは今年74歳になる。後期高齢者も間近だ。15歳で虫垂炎の手術をした。昔だったら、そこで一卷の終わりだった。仮に生きながらえても、64歳で手術した肺がんでアウトだったろう。医学の進歩でここまでやってこられた。これは「めでたくもあり」だが、「めでたくもなし」の面もないわけではない。自分が自分でなくなってしまう認知症や長期間の介護が必要な寝たきりの病気などである。わたしもそういうことを心配せざるを得ない年齢になってきた。

眼の衰えは仕方ないとして、最近、名前など固有名詞が直ぐにでてこないことに気がついた。通勤には地下鉄大江戸線の「赤羽橋」で下車していたが、退職後に勤務先に行く時はJR線を利用したので、7年ほど遠ざかっていた。ある時、「赤羽橋」がでてこないことに気がついた。「橋」がついていることは覚えていたが、「大江戸線」が邪魔をして「江戸川橋」しか浮かんでこなかった（これが間違いであることは分っていたが）。手前の「麻布十番」や「六本木」は直ぐに出てきたのだが。テレビのコマーシャルに出てくる女優さんの名前もでてこないことが多い。しばらく思い出そうとしていると、ポッと出てきたりする。妻との会話では普通名詞も思い出すのが面倒なのか、お互いにアレ、コレなど代名詞が多くなっている。仕方ないが、困ったことである。健康に老いるのは難しい。